

学校体育の柔道種目における生徒の認識に関する研究

A Study on Student's Recognition in Judo of School Physical Education Class

齋藤正俊・杉山真人・葦原摩耶子

SAITO masatoshi

SUGIYAMA masato

ASHIHARA mayako

要旨：この研究は体育の授業における柔道に対する中学1、2年男女生徒、及び高校1年生男女生徒の意識調査である。因子分析から意識構造を把握し、因子内の男女、中高生、学年間の意識水準の比較を試みた。武道必修化を受けて現場の中学校では、武道の授業研究がなされているが、指導に不安を抱えている教員が多いと聞く。この研究結果は授業研究の基礎資料となるはずである。

Abstract

This research material for this paper comes from surveys given to both boy and girls students from first and second year junior high school students and first year high school regarding the teaching of judo as part of the physical education program at Japanese schools. Analyzing the information gathered we attempt to compare the level of understanding along with the differences of opinions between boys and girls, junior high students and high school students. At junior high school teaching judo is a compulsory subject; however there is evidence that supports that many of the teachers are unsure and anxious about teaching the subject. The results of this research should be used as the building blocks for preparing the material required for teaching judo at Japanese schools.

キーワード：授業研究、因子分析、楽しさ・いやさ、中高生

Key Words: Lesson study, Factor analysis, pleasure • displeasure, middle and high school student,

I はじめに

嘉納治五郎師範（以下、嘉納）によって1882年に創始された日本伝講道館柔道（以下、柔道）は、今や国際柔道連盟の加盟が200の国と地域にまで発展しているといわれる。

青年時代嘉納は柔術を学んだ。柔術の誕生は武士が戦場において敵を倒し敵に勝つことができる武技である。戦乱期においての戦いは最終的には甲冑に身を固めた相手に対して刀で斬り合うというより体ごと組んで倒すという組み討ちの方法がとられ、倒した後に甲冑の隙間から刀を突き刺して相手を倒したのである。

柔道はこれらの流れを経て嘉納がいくつかの流派をまとめて柔道としたのである。柔道という言葉

葉は嘉納の創始によるものではない。柔道という言葉は嘉納が講演で述べているように「一、二の流儀で用いていた柔道という名称」（村田2001）として既に存在していたのである。

柔道という名称は歴史上あったのだがきわめてまれであった。柔術は明治の当初身体を害し益することはないもののように考えられていた。また、世間は柔術を一種の見世物にしたりする者がいたり、お金を取って相撲や軽業をなす場所で人に見せたりする者がいたりした。

嘉納はそれらと同一視されることを嫌ったのである。しかし、柔術の伝統、その道の古人についての功労を消滅すべきではないと考えたのである。そのため、柔術の「柔」の字と「道」とを合体し

て柔道と命名したのである。

柔道の創始者である嘉納は教育者でもある。

東京帝国大学を卒業後学習院の講師を最初に最後は東京高等師範学校の学校長という教育畑を歩み通したのである。

嘉納の教育的思想は人間はいかに生きるべきか、という道徳的教育思想である。そのため柔道はその思想を呈した人間形成のための方法・手段として位置づけられ、学校体育の中で行われてきた。

教育者であった嘉納が思っていた柔道は学校体育の中でどのように進んできたのか。

戦時中までは武道という言葉が残っており、中学校では授業がなされていた。しかし、戦後アメリカ軍 GHQ（連合軍総司令部）の一部局 CIE（民間情報局教育部）により武道授業が廃止となり、それは学校での柔道は昭和25年10月、弓道は昭和26年、剣道は昭和27年の復活まで続いた。

その後、昭和33年「格技」という名称のもとに中学校の体育授業の中で柔道、剣道、相撲ができるようになったが、大きな転換は平成元（1989）年の学習指導要領において、格技から武道に名称が変わったことである。そのときの改訂に際して「武道」に関連した部分では、「～今日では武道は国際的にも日本の伝統的な運動文化として広く理解されており、もはや社会的にも学問的にも武道を用いる方が適切である」と当時の学習指導要領改訂の経緯に書かれている（文部省1993）。

その流れを経て、平20年9月告示の中学校学習指導要領では中学校体育において武道は必修となり、平成24年からは現場で指導が実施された。

果たして武道の柔道はどのように生徒たちにとらえられているのだろうか。

この研究は、武道必修化を受けて体育授業・柔道を経験した中学生の意識と高校生の意識に焦点を当て、どのように授業の柔道をとらえているのか、基礎資料を得ることを目的とする。

II 研究方法

1. 調査用紙

調査用紙は齋藤らが2004年に使用した正課体育『柔道』の楽しさに関する意識調査で「楽しさ」に関する質問42設問、「いやさ」に関する質問34

設問のものを使用する。その際、フェイスシート部分に男女、中高、学年を含めた7件の質問項目を加えて意識調査票を構成する。

2. 調査日時

平成27年12月

3. 調査対象

大阪府内私学J学園中等部1、2年生男女、同じく高等部1年男女合計502名のデータを収集する。

4. アンケートの配布及び回収

大阪府内私学J学園に郵送し、中学、高等学校の体育授業・柔道の授業終了時に配布しその場で回答並びに回収する。

5. データ処理

1) 意識構造把握

- (1) エクセルを用い回答を打ち込み、スクリーニング後の485名（96.6%）のデータをSPSSスタテクィスバージョン22に読み込ませ、因子分析を行う。
- (2) 因子分析は主因子法バリマックス回転法で行う。バリマックス回転において因子間に0.4以上の負荷が2重に出現しなくなるまで何度も回転を行う。
- (3) 因子数の決定は初期の固有値の値が1.0以上を判断規準とする。
- (4) 因子数が決定した時点において因子の命名を行う。
- (5) 因子の解釈命名は因子負荷の高い設問を中心に行う。

2) 意識水準

授業の柔道を経験してどのように柔道をとらえているか7件の質問項目内の男女、中高間、学年間について意識水準の比較を試みる。2群間の差を検定するために対応のないt検定を行う。3群間については差を検定するために一元配置の分散分析を行い、F値が有意であった場合にはTukeyのHSD法でその後の検定による多重比較を行い有意差を確認する。有意水準は5%未満とする。

III 結果

1. 「楽しさ」の意識構造 (表1)

「楽しさ」の意識構造を把握するために、1つの設問に対して0.4以上の負荷量を2重に示していた場合はその設問を削除していき、結果として42設問から20設問に決定し、因子分析を行った結果、表1の下欄にあるように累積寄与率61.3%、3因子解を得ることができた。

1) 因子の命名

各因子の命名については以下のように命名した。因子名の後に該当設問数と全分散比を示した。括弧内は因子負荷量である。

第1・技能上達因子・6設問、36.2%

問10. 覚えた技を実践で使えたとき、喜びを感じる。(.777)

問12. 自分の技で一本を取ったときは充実感がある。(.755)

問9. 相手を投げとばした瞬間はスカッとする。(737)

問20. 試合で自分のイメージした通りに連続技がきまった時は最高である。(719)

問15. 練習した技が実践で使えたときは達成感がある。(684)

問8. いい試合をしたときは気分がよい。(652)

練習した技が使えたり、一本を取って勝利したときの充実感、技能上達や達成感を表しているのので、技能上達因子と命名した。

第2・真剣体験因子・9設問、34.2%

問3. 柔道は真剣勝負と同じだから楽しい。(689)

問5. 柔道の試合後の解放感は何ともいえない。(673)

問4. 柔道は高校生の体育の教養としてよい。(653)

問1. 柔道は全身運動ができてよい。(646)

問32. 先生の教え方がわかりやすいので柔道に興味を持った。(582)

表1 「楽しさ」の意識構造
Table1 Consciousness structure of "Pleasure"

Factor name	Number and contents of questions	1	2	3	h ²
F1 技能上達	10. 覚えた技を実戦で使えたとき、喜びを感じる。	.777	.317	.296	0.793
	12. 自分の技で一本を取ったときは充実感がある。	.755	.362	.292	0.786
	9. 相手を投げとばした瞬間はスカッとする。	.737	.284	.190	0.660
	20. 試合で自分のイメージした通りに連続技がきまったときは最高である。	.719	.291	.321	0.705
	15. 練習した技が実践で使えたときは達成感がある。	.684	.352	.387	0.741
	8. いい試合をしたときは気分がよい。	.652	.381	.266	0.641
F2 真剣体験	3. 柔道は真剣勝負と同じだから楽しい。	.353	.689	.238	0.656
	5. 柔道の試合後の解放感は何ともいえない。	.339	.673	.220	0.616
	4. 柔道は高校生の体育の教養としてよい。	.335	.653	.314	0.638
	1. 柔道は全身運動ができてよい。	.186	.646	.325	0.557
	32. 先生の教え方がわかりやすいので柔道に興味をもった。	.300	.582	.355	0.555
	29. 柔道には他のスポーツとちがったおもしろさがある。	.354	.537	.389	0.565
	6. 「柔よく剛を制す」の精神が柔道である。	.345	.501	.367	0.505
	26. 体でぶつかりあい、互いに努力しときに親近感が芽生える。	.363	.486	.328	0.475
	19. きれいにスムーズに技をかけられたときは投げられても楽しい。	.378	.474	.209	0.411
F3 護身有用	36. 柔道は護身術として自分を守る力がつく。	.235	.298	.764	0.728
	33. 柔道をやっていると、いざというときにやくにたつ。	.273	.330	.682	0.649
	27. 受身を覚えていると、こけたときに頭をうたなくてすむ。	.238	.266	.666	0.572
	23. とっさのときの受身ができるようになったらよいと思う。	.259	.191	.641	0.514
	14. 柔道のよいところは礼儀を学べることである。	.255	.344	.571	0.510
	Eigenvalue	4.440	4.200	3.635	12.276
	Raito of variance to total eigenvalue (%)	(36.2)	(34.2)	(29.6)	100.0
	Cumulative eigenvalue (%)	12.276	(61.3)		

F1：技能上達；Progress in skill. F2：真剣体験；Serious experience. F3：護身有用；Usefulness of self-protection

問29. 柔道には他のスポーツとちがったおもしろさがある。(.537)

問6. 「柔よく剛を制す」の精神が柔道である。(501)

問26. 体でぶつかりあい、互いに努力したときに親近感が芽生える。(486)

問19. きれいにスムーズに技をかけられたときは投げられても楽しい。(474)

対人競技としての柔道自体を楽しみ、勝負に対して真剣に取り組み相手とぶつかり合うことに楽しさを感じていたので真剣体験因子と命名した。

第3・護身有用因子・5設問、29.6%

問36. 柔道は護身術として自分を守る力がつく。(764)

問33. 柔道をやっていると、いざというときにやくにたつ。(682)

問27. 受身を覚えていると、こけたとき頭をうたなくてすむ。(666)

問23. とっさのときの受身ができるようになったらよいと思う。(641)

問14. 柔道のよいところは礼儀を学べることである。(571)

柔道は役に立ち護身術にもなり得ること、礼儀を学ぶことによって精神的な強さが得られることなど、心身両面で護身の有用性を実感しているので護身有用因子と命名した。

2) 「楽しさ」の意識水準 (表2-4、図1-3)

「楽しさ」における男女、中学校1、2年と高校1年、中1・中2・高1間における意識差は以下の通りである。

(1) 男女の意識比較

表2、図1からわかるように第1・技能上達因子と第2・真剣体験因子において意識差が見られ、第3・護身有用因子において意識差はみられなかった。

(2) 中高の意識比較

表3、図2より、男女の場合と同様に第1・技能上達因子と第2・真剣体験因子において意識差が現れ、第3・護身有用因子では意識差はみられなかった。

表2 楽しさ：対応のないt検定 (男女)
Table2 Pleasure: t-test without of correspondce "school boys and girls"

Factor name	男子 (N=367)		女子 (N=118)		有意差
	M	SD	M	SD	
1. 技能上達	0.088	0.913	-0.273	0.891	P<0.01
2. 真剣体験	0.059	0.905	-0.184	0.744	P<0.01
3. 護身有用	0.004	0.891	-0.011	0.874	NS

F1：技能上達；Progress in skill, t(483)=3.750, P<.01
F2：真剣体験；Serious experience t(483)=2.651, P<.01
F3：護身有用；Usefulness of self-protection

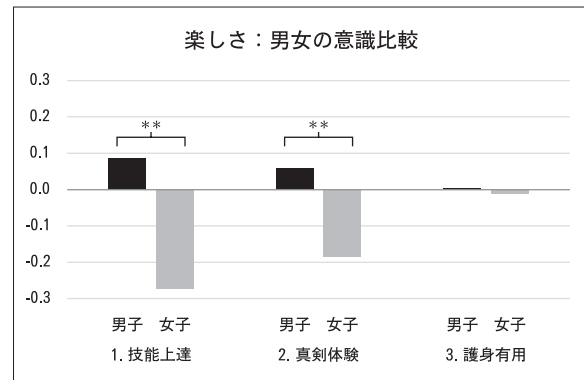


図1 楽しさ：男女の意識比較
Figure1 Pleasure: Consciousness differences between school boys and girls
男子：school boys. 女子：school girls.

表3 楽しさ：対応のないt検定 (中高)
Table3 pleasure: t-test without of correspondce "junior high school and high school"

Factor name	中 (N=168)		高 (N=317)		有意差
	M	SD	M	SD	
1. 技能上達	-0.135	0.970	0.072	0.885	P<0.05
2. 真剣体験	-0.229	0.775	0.122	0.900	P<0.01
3. 護身有用	0.029	0.895	-0.016	0.883	NS

F1：技能上達；Progress in skill, t(483)=2.366, P<.05
F2：真剣体験；Serious experience, t(483)=4.283, P<.01
F3：護身有用；Usefulness of self-protection

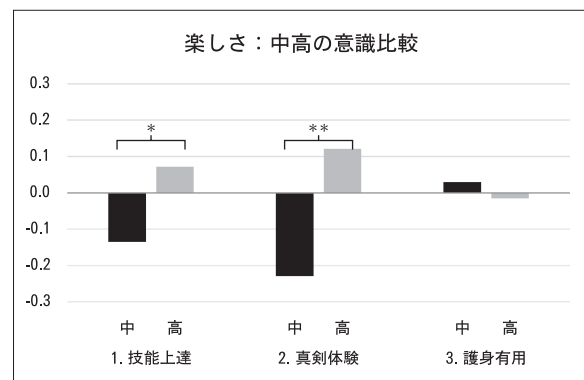


図2 楽しさ：中高の意識比較
Figure2 pleasure: Consciousness differences between junior high school and high school
中：junior high school. 高：high school.

(3) 学年間の意識比較 (中1・中2と高1)

表4、図3から、3因子のすべてに意識差がみられた。第1・技能上達因子では中1と高1間及び中2と高1において意識差が現れたが、中1と中2間では差は現れなかった。第2・真剣体験因子においては中1と高1間

ではみられたが、中1と中2そして中2と高1の間では差は認められなかった。第3・護身有用因子では中1と中2、中1と高1に差が現れ、中2と高1間には意識差は確認できなかった。

表4 楽しさ：1要因の分散分析検定 (学年)
Table4 Pleasure: the analysis of variance 1factor "Junior and high school grade"

Factor name	中1 (N=152)		中2 (N=76)		高1 (N=257)		有意差
	M	SD	M	SD	M	SD	
1. 技能上達	-0.110	1.003	-0.292	0.876	0.151	0.852	p<0.05, p<0.01
2. 真剣体験	-0.232	0.827	-0.052	0.725	0.153	0.911	P<0.01
3. 護身有用	-0.204	0.891	0.211	0.825	0.058	0.881	p<0.05, p<0.01

F1：技能上達；Progress in skill, $t(407)=2.798$, $P<0.05$, $t(331)=3.958$, $P<0.01$

F2：真剣体験；Serious experience, $t(407)=4.266$, $P<0.01$

F3：護身有用；Usefulness of self-protection, $t(407)=2.900$, $P<0.05$, $t(226)=3.394$, $P<0.01$

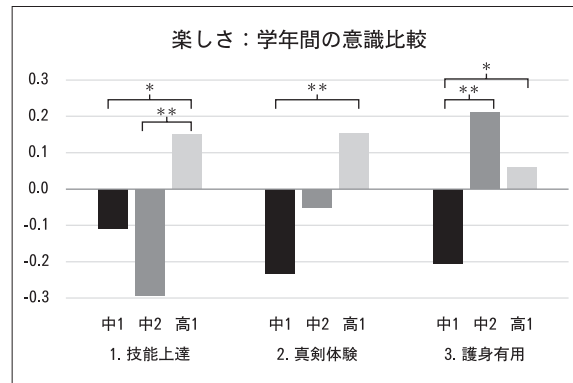


図3 楽しさ：学年間の意識比較
Figure3 pleasure: Consciousness differences and high school of the school year
中1：Junior high school 1 year. 中2：Junior high school 2 year.
高1：1 grad high school.

2. 「いやさ」の意識構造 (表5)

楽しさの意識構造の把握と同様に、1つの設問に対して0.4以上の負荷を2重に示していた場合は削除していき、結果として34設問から21設問を決定し、因子分析を行った結果、表5の下欄にあるように累積寄与率49.5%の下、解釈可能な4因子解が得られた。

1) 因子の命名

第1・消極志向因子・13設問、54.8%

問73. 柔道で勝負にこだわることは問題である。(778)

問64. 体重が違いすぎる相手に思いっきり投げられるのはいやだ。(762)

問62. 柔道では相手にけがをさせてしまうかもしれないので気が進まない。(759)

問70. 寝技でおさえつけられたりしたときは苦しい。(702)

問61. 柔道はある程度身に付くまで、同じ基本を繰り返ししなければならぬのがいやである。(682)

問67. 怖い投げられ方をされたとき柔道は危ないと思う。(668)

問72. 柔道は体が大きい人の方が得だから不公平だ。(642)

問57. 柔道は何かと痛いことが多い。しかたがないけどいやだ。(636)

問71. 受身を失敗したときは柔道がいやになる。(625)

問75. 柔道は、全然こつがつかめずおもしろくない。(610)

表5 「いやさ」の意識構造
Table5 Consciousness structure of "displeasure"

Factor name	Number and contents of questions	1	2	3	4	h ²	
F1 消極 極 志 向	73. 柔道で勝負にこだわることは問題である。	.778	.153	.125	-.025	0.646	
	64. 体重が違いすぎる相手に思いっきり投げられるのはいやだ。	.762	.032	.184	.236	0.672	
	62. 柔道では相手にけがをさせてしまうかもしれないので気が進まない。	.759	.092	.054	.119	0.602	
	70. 寝技でおさえつけられたりしたときは苦しい。	.702	.165	.235	.123	0.590	
	61. 柔道ではある程度身に付くまで、同じ基本を繰り返さなければならぬのがいやである。	.682	.060	.074	.285	0.555	
	67. 怖い投げられ方をされたとき柔道は危ないと思う。	.668	.142	.211	.079	0.517	
	72. 柔道は体が大きい人の方が得だから不公平だ。	.642	.258	.147	-.279	0.578	
	57. 柔道は何かと痛いことが多い。しかたがないけどいやだ。	.636	.047	.314	.263	0.574	
	71. 受身を失敗したときは柔道がいやになる。	.625	.176	.179	.139	0.472	
	75. 柔道は、全然こつがつかめずおもしろくない。	.610	.328	.027	.056	0.483	
F2 不快 感情	50. 冬場の畳が冷たくて柔道は大嫌いである。	.526	.008	.339	.057	0.395	
	68. 柔道の勝負判定はわかりづらくておもしろくない。	.474	.213	.327	.120	0.391	
	49. 力まかせの人と柔道するのは楽しくない。	.376	.083	.355	.174	0.305	
	74. スタミナがなかったので柔道はしんどい。	.207	.863	.125	.067	0.808	
	76. 相手が腰が引いているときはいらいらする。	.155	.827	.157	.110	0.745	
	65. 受身を失敗したりして痛かったときは柔道は嫌いである。	.155	.319	.283	.206	0.248	
	F3 基本 批判	47. 乱取りが少ない授業はつまらない。	.101	.091	.643	.024	0.433
		45. 受身の反復練習はあきがる。	.160	.040	.519	.077	0.302
		59. 柔道の授業では自分のフォームが正しいかよく分からない。	.293	.183	.464	.287	0.417
		53. マナーの悪い人がいると柔道はやる気がしない。	.023	.313	.412	-.093	0.277
F4	58. 柔道の授業は素人と経験者の差が大きすぎるのでおもしろくない。	.303	.225	.163	.457	0.378	
Eigenvalue		5.691	2.065	1.874	0.756	10.386	
Ratio of variance to total eigenvalue (%)		(54.8)	(19.9)	(18.0)	(7.3)	(100.0)	
Cumulative eigenvalue (%)		10.386	(49.5)				

F1：消極志向；Negative intention. F2：不快感情；Unpleasant feeling. F3：基本批判； Criticism to bases.
F4：経験実感；An experience actual feeling.

問50. 冬場の畳が冷たくて柔道は大嫌いである。
(.526)

問68. 柔道の勝負判定はわかりづらくておもしろくない。(474)

問49. 力まかせの人と柔道するのは楽しくない。
(.376)

勝負にこだわることは問題、体重が違いすぎる相手に思いっきり投げられるのはいやだ、相手にけがをさせてしまうかもしれないので気が進まない等の柔道に対する取り組みが消極的であるため、消極志向因子と命名した。

第2・不快感情因子・3設問、19.9%

問74. スタミナがなかったので柔道はしんどい。
(.863)

問76. 相手が腰が引いているときはいらいらする。(827)

問65. 受身を失敗したりして痛かったときは柔道は嫌いである。(319)

柔道における乱取りや試合におけるスタミナ切

れ、相手の対応、受身の失敗などの痛みに感情的に不快感を表す因子である。

第3・基本批判因子・4設問、18.0%

問47. 乱取りが少ない授業はつまらない。
(.643)

問45. 受身の反復練習はあきがる。(519)

問59. 柔道の授業では自分のフォームが正しいかよく分からない。(464)

問53. マナーの悪い人がいると柔道はやる気がしない。(412)

柔道の学習過程で、乱取りの少ない授業や基本である受身の反復練習を「つまらない、あきがる」と批判的に捉えている因子。

第4・経験実感因子・1設問、7.3%

問58. 柔道の授業は素人と経験者の差が大きすぎるのでおもしろくない。(457)

学習のはじめの段階や乱取り等の際に感じる経験者との差は乗り越えがたいと実感した因子。

2) 「いやさ」の意識水準 (表6-8、図4-9)
 男女、中学校1、2年と高校1年、中1・中2・高1間における意識差は以下の通りである。

(1) 男女の意識比較

表6、図4を見ると、第1・消極志向因子と第3・基本批判因子において意識差が現れ、第2・不快感情因子と第4経験実感因子では意識差はみられなかった。

(2) 中高の意識比較

表7、図5からわかるように第3・基本批

判因子のみに意識差が現れた。他の第1・消極志向因子、第2・不快感情因子、第4経験実感因子においては意識差がみられなかった。

(3) 学年間の意識比較

第3・基本批判因子及び第4・経験実感因子に意識差がみられた。第1・消極志向因子、第2・不快感情因子においては意識差が現れなかった。

表6 いやさ：対応のないt検定 (男女)
 Table6 Displeasure: t-test without of correspondce "school boys and girls"

Factor name	男子 (N=367)		女子 (N=107)		有意差
	M	SD	M	SD	
1.消極志向	-0.070	0.980	0.239	0.762	P<0.01
2.不快感情	0.016	0.950	-0.054	0.832	NS
3.基本批判	0.064	0.822	-0.220	0.721	P<0.01
4.経験実感	-0.026	0.722	0.088	0.664	NS

F1 : Negative intention, t(472)=3.010, P<.01
 F2 : Unpleasant feeling
 F3 : Criticism to bases, t(472)=3.231, P<.01
 F4 : Experience actual feeling

表7 いやさ：対応のないt検定 (中高)
 Table7 Displeasure: t-test without of correspondce "junior high school and high school"

Factor name	中 (N=157)		高 (N=317)		有意差
	M	SD	M	SD	
1.消極志向	0.087	0.864	-0.043	0.979	NS
2.不快感情	0.026	0.745	-0.013	1.002	NS
3.基本批判	-0.188	0.822	0.093	0.839	P<0.01
4.経験実感	0.014	0.689	-0.007	0.722	NS

F1 : Negative intention
 F2 : Unpleasant feeling
 F3 : Criticism to bases, t(472)=3.601, P<.01
 F4 : Experience actual feeling

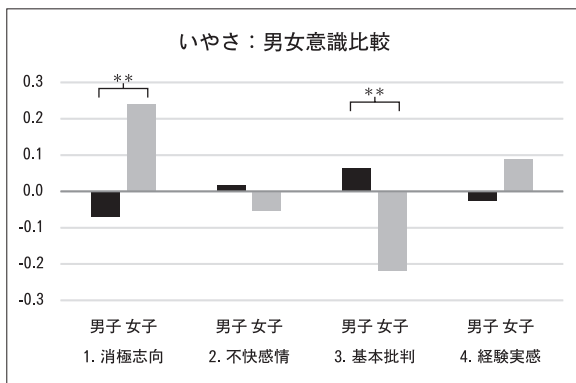


図4 いやさ：男女意識比較
 Figure4 Displeasure: Consciousness differences between school boys and girls
 男子：school boys. 女子：school girls.

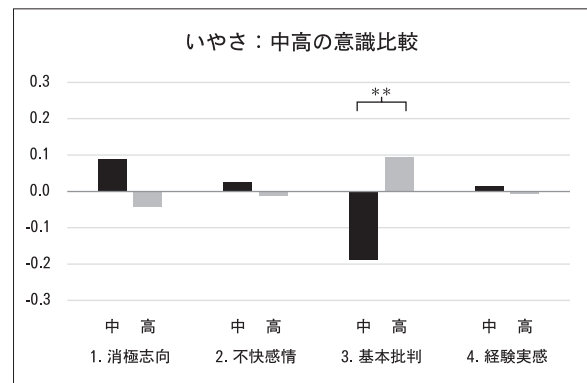


図5 いやさ：中高の意識比較
 Figure5 Displeasure: Consciousness differences between junior high school and high school
 中：junior high school. 高：high school.

表8 いやさ：1要因の分散分析検定（学年）
Table8 Displeasure: the analysis of variance 1factor “Junior and high school grade”

Factor name	中1 (N=92)		中2 (N=65)		高1 (N=317)		有意差
	M	SD	M	SD	M	SD	
1.消極志向	0.168	0.957	-0.028	0.703	-0.043	0.979	NS
2.不快感情	0.043	0.740	0.002	0.756	-0.013	1.002	NS
3.基本批判	-0.181	0.627	-0.196	0.815	0.093	0.839	P<0.05
4.経験実感	0.153	0.690	-0.182	0.643	-0.007	0.722	P<0.05

F1：Negative intention

F2：Unpleasant feeling

F3：Criticism to bases, $t(407)=2.907, P<.05$ $t(380)=2.546, P<.05$

F4：Experience actual feeling, $t(155)=3.080, P<.05$

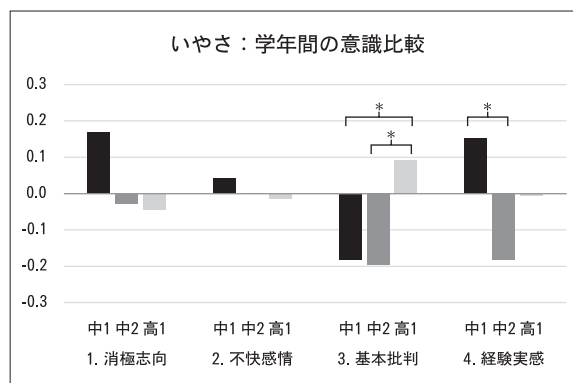


図6 いやさ：学年間の意識比較

Figure6 Displeasure: Consciousness differences and high school of the school year
中1：Junior high school 1 year. 中2：Junior high school 2 year.
高1：1 grad high school.

IV 考察

1. 「楽しさ」の意識構造と意識水準差

第1・技能上達因子

技が使えるようになり、乱取りや試合において一本を取って勝利を感じたときの充実感を表す因子であるが、男子は勝負に真剣に取り組んでいるのか、女子と比較すると技能上達を実感していた。中高生の比較を見ると高校生は時間的に積み重ねの授業数の多さがベースにあり、技能が上達したことを実感している。学年別に見ると高校1年生がやはり授業時間数の関係と併せて技の技術性に興味を持って取り組んだのかもしれない、中1、中2より上達していると感じている者が多いと言える。学年が進むにつれ技能の上達が実感でき、楽しさを感じているようである。但し、中2に関して技能の上達を感じていないのが気になるところである。

第2・真剣体験因子

生徒は柔道の持つ精神性、体育の一環としての位置づけを真剣に捉え、対人競技として柔道に楽

しみを持って取り組んでいる姿勢が見えるが、意識を比較すると3項目すべてにおいて差が現れている。男子は真剣に取り組んでいる姿勢が見られるが、女子は争いごとが嫌いなのであろう、取り組みに積極的ではない。中高の比較においては、高校生は好意を持って捉えていた。高校における柔道の時間は必然的に中学校の経験を基に進めていくが、その中で技能の上達を実感していることや対人競技である面白さがあいまって肯定的に捉えることになったのかもしれない。学年別の比較では、中高の比較と同じ傾向がよみ取れる。中1は柔道の授業を初めて経験するが、その際、けが予防の安全な取り組みを身につけさせるために、受身や技の反復練習が中心になる。そのため、楽しみには結びついていないようだ。中2については少しずつではあるがいやな意識は薄れつつあるが、それでも楽しむまではいっていない。しかし、高1は中学生と比較して、特に中1との比較については、乱取りも増え、投げたり投げられたりの時間をクラスメートと共有できたのであろう、有

意に楽しさを持ってとらえていた。

第3・護身有用因子

柔道は護身術として、受身はけがから体を守るのに有用であることや礼儀を学ぶことにも役に立つと考える因子であるが、男女に意識差はみられない。データを見る限り護身の有用性に意識がなく、重きをおいていないように見受けられる。中高の比較についても意識差はない。中学生の方がわずかに肯定意識はみられるが、強い意識ではない。学年ごとの比較をみると中2の意識が一番強く護身の有用性を認めていた。高1も有用性を肯定的に捉えているが、中1は否定的である。このような現れ方は、やはり初めて経験することと経験済みの違いからきているように思われる。技の上達も実感できず、楽しむこともできず、柔道のもつ心身両面の護身の有用性への理解も進んでいない。せめてけが予防の観点での受身や社会性の観点からの礼儀の有用性を理解させる指導の工夫が必要であろう。

2. 「いやさ」の意識構造と意識水準差

第1・消極志向因子

柔道の授業に対して消極的に捉えている因子である。男女の比較をみると女子は争いごとやけがへの心配などの思いが強いのだろうか、柔道への取組がきわめて消極的である。中高の比較を見ると高校生では少しは楽しみを見いだしているが、中学生は投げてけがをさせる、投げられてけがをするなどの心配や反復練習中心の授業への反発か、楽しさを感じておらず、消極的である。学年別では意識差は確認できないが、中1に消極的な傾向が見られるようである。初めての経験が受身の痛みというような身体に直接感じるマイナス的なことが影響しているように思われる。中2、高1は柔道の授業を経験済みのためいやな気持ちが消えつつあり、消極的ではない。

第2・不快感情因子

自分のスタミナのなさや相手の態度に感情的に不快を持つ因子であるが、男女に意識差はなく、女子はさほど柔道にいやさを持っていない。中高の比較についても同様である。学年の比較においても意識差は見られず、上の学年に進むにしたがっ

ていやさが薄らいでいる。柔道とはこのようなものだと納得しているのであろうか。

第3・基本批判因子

男女差を見ると男子が基本の学習に対して批判的であり有意に差が見られた。男子は技能上達を望む傾向にあり、基本の受身の学習より技を習得し乱取や試合をしたいのであろう。反対に女子は、基本は大切であると認識している者が多いと言える。中高の比較と学年別を見ると高校生の方が乱取りの少ない授業や受身の反復練習には批判的である。中1、中2を見ると基本学習は大切であるという意識が現れているように思われるが、これが中高の比較に反映しており、高校生は中学時代の基本中心の授業への批判が乱取や試合を経験したことによって、組み合って勝負に向き合うこと・真剣体験に楽しさを見いだしたため、中学時の学習を思い出し、基本批判に傾むいたのかもしれない。

第4・経験実感因子

男女、中高の比較において意識差はみられなかった。しかし、学年の比較において有意に意識差が現れた。中1と中2の間であるが、中1では柔道は経験がものをいう、と考える傾向が強い。中2、高1はそうは思っていない。特に中2は経験差を感じていないようである。中1は授業で経験者の受身のうまさや技の示範を見て経験に裏付けられた技術性に注目したのか、少ない乱取稽古を通して感じたのか、「素人と経験者の差が大きすぎる」を感じた意識が強かった。

V まとめ

中高生男女合計485名の因子分析を行った結果、解釈可能解と累積因子寄与率は、「楽しさ」の意識は3因子解61.3%、「いやさ」の意識4因子解49.5%であった。群間差を含めた結果は以下の通りである。

1. 「楽しさ」の意識構造と意識水準

- 1) 意識構造は寄与率の順に第1・技能上達因子、第2・真剣体験因子、第3・護身有用因子の3因子解が得られた。
- 2) 意識水準の比較では、第1、2因子において、男女間と中高間で意識差が現れ、学年の比較に

についてはすべての因子において意識差が現れていた。

2. 「いやさ」の意識構造と意識水準

- 1) 意識構造は第1・消極志向因子、第2・不快感因子、第3・基本批判因子、第4・経験実感因子の4因子解に収斂し、消極志向因子において分散比の54.8%をしめていた。
- 2) 意識水準差は、男女では柔道への取り組みで女子は消極的であるが、基本について批判的にとらえていない傾向にある。中高の比較では高校生が基本の反復練習等について批判的であり、学年間においても高1生が基本の学習には批判的である。しかし、経験実感については高校生はさほど感じていず、中1生が経験の差を感じていた。

これからの男女の武道授業・柔道の学習を考えると、授業では消極的な意識を持たないように、けが予防の観点からも受身の有用性と護身を認識できる場面や楽しさを感じることでできる真剣体験の場を設定する授業を工夫すること。基本と技の学習過程において投技の爽快感を味わうことができる等の授業の工夫をすることによって、中1の段階や女子の取り組みも積極性へと認識が変わっていくのではないだろうか。

参考文献

- 船越正康：柔道に関する因子分析的研究、(二) 高校生男子の意識特徴、柔道、62-4、68-72、1991。
 船越正康：柔道に関する因子分析的研究、(三) 中・高等学校全国大会出場者について、柔道、62-11、59-64、1991。
 船越正康：柔道に関する因子分析的研究、(六) 国際比較－フランス編、柔道、67-6、59-64、1991。
 船越正康ほか：指導に伴う柔道に関する意識変容の研究－高校生の成果体育について－大阪武道学研究、8-1、1-11、1998。
 比留間浩介ほか：一般生徒におけるスターティングブロックの設置方法が疾走パフォーマンスにおよぼす影響：男女差に着目して、体育学研究 60、651-665、2015。
 小塩真司：SPSS と Amos による心理・調査データ解析因子分析・共分散構造分析まで、東京図書、2005。
 松尾太加志・中村智晴：誰も教えてくれなかった因子分析、北大路書房、1-114、127-167、2016。
 文部省：学校体育実技指導資料 第2週 柔道指導の手引き(改訂版)、第1章、1、1993。
 文部科学省：中学校学習指導要領、15、2008。
 文部科学省：中学校学習指導要領解説保健体育編、3、2008。
 村田直樹：嘉納治五郎師範に学ぶ、日本武道館、12-28、2001。
 齋藤正俊ほか：正課体育における柔道の語彙収集－高校生男子の場合－、大阪武道学研究、12-1、17-27、2003。
 齋藤正俊ほか：正課体育「柔道」の楽しさに関する授業前意識調査－高等学校男子生徒の意識分析から－、大阪武道学研

究、13-1、1-10、2004。

齋藤正俊ほか：柔道に関する高等学校男子生徒の意識分析、講道館科学研究紀要 第十輯、160-169、2005。

齋藤正俊ほか：中学校武道教材「柔道」について－中学校保健体育科教員の意識調査から－、講道館科学研究紀要 第十四輯、2013。

正田 良：統計入門因子分析の意味がわかる、ベレ出版、2008。

藤堂良明：柔道の歴史と文化、不味堂出版、181-190、2007。